

## 『罪と罰』における「ドイツ」のイメージ

### The image of “Germany” in the “Crime and Punishment”

木寺 律子

KIDERA Ritsuko

**要旨：**F.M. ドストエフスキーの『罪と罰』には、ドイツ文学やドイツ観念論哲学の影響が見られるだけでなく、ドイツ製の品物が多く描かれ、サンクトペテルブルグに移り住んでいたドイツ系移民の姿が多く描かれている。ドイツ文化の影響がペテルブルグの一般市民の日常生活にまで及んでいたことが分かる。この作品の主要な登場人物であるラスコーリニコフやラズーミヒンやスヴィドリガイロフはドイツ語に堪能で、シラーなどのドイツ文学の影響を強く受けている典型的なロシアの知識人層に属しているが、彼等、とりわけスヴィドリガイロフのドイツ人との関わりは、彼の人物像を理解する上で重要である。

**【キーワード】** F.M. ドストエフスキー、ドイツ、サンクトペテルブルグ、移民、フリードリヒ・シラー

**Abstract:** We can find not only the influence of German literature and German philosophy in the “Crime and Punishment” by F.M. Dostoevsky, but also the description of German things and German immigrants in Saint-Petersburg. We can understand that German culture was spread over the real usual lives of the people in Saint-Petersburg. Ras-kolnikov, Razumihin, and Svidrigairov are good at German, and they are under the influence of the works by Friedrich Schiller. Especially, the Svidrigairov’s relationship with German women is important to understand the character of Svidrigairov.

**【Keyword】** F.M. Dostoevsky, Germany, Saint-Petersburg, Immigrants, Friedrich Schiller

#### 1. 初めに

F.M. ドストエフスキー (1821-1881) の文学全般や、彼の主要な作品である『罪と罰』(1866) にドイツ文学とドイツ哲学の影響が見られることは、先行研究ですでに非常に多く論じられてきた。ドストエフスキー文学へのドイツ文学の影響を扱う比較文学的な研究には優れたものがすでに多くある。その一部を挙げるとするならば、ドストエフスキーをシラーの作品と比較しつつ検討する研究は、N. ヴィリモン<sup>1)</sup>や R. ダニレフスキー<sup>2)</sup>、井桁貞義<sup>3)</sup>、K. ハミストン<sup>4)</sup>などによって行われてきた。ドイツの哲学との関連でドストエフスキーの思想を検証する研究には、イマヌエル・カント (1724-1804) の哲学によって『カラマーゾフの兄弟』を論じる Ya. ゴロソフケルの研究<sup>5)</sup>や、ドストエフスキーよりも後の時代のド

イツの哲学者であるフリードリヒ・ニーチェ (1844-1900) とドストエフスキーの思想の類似点を検証する L. シェストフ<sup>6)</sup>や W. シューバルト<sup>7)</sup>や P. キンドロン<sup>8)</sup>の研究などもある。

しかし、これらの研究はドイツ文学作品の引用や文学作品相互の内容的な関連に着目することが多く、哲学や思想を論じることに焦点を絞っている。その一方で、『罪と罰』において、小説の冒頭から立て続けにドイツの品物やドイツ人が多く登場することには今まであまり注意が払われてこなかった。ドイツ製の品物やドイツ人の描写は小説の主要な筋書きとは直接の関わりがなく、さまざまなエピソードの間に挟まって登場するので、読者の注意をそれほど惹かないが、実は非常に数が多い。

本論ではこのドイツ製の品物やドイツ人に着目し、『罪

と罰』の登場人物達の日常生活に身近なところにあるドイツのイメージを考察する。また、19世紀のサンクトペテルブルグにおけるドイツ系移民の生活に関する歴史的事実も確認する。その上で、こういった日常生活におけるドイツのイメージが、伝統的なドストエフスキー文学研究において論じられてきた思想的問題にどのように関わってくるのかを検討する。ドイツのイメージの考察は、とりわけスヴィドリガイロフの人物像を理解する鍵のひとつでもある。

## 2. ドイツ製の品物と医者や家主たち

『罪と罰』の冒頭で主人公ラスコーリニコフが考え事をしながらサンクトペテルブルグの通りを歩いていると、通りすがりの酔っ払いに「おいお前、ドイツシャボ<sup>9)</sup>！」と声をかけられる。これを聞いたラスコーリニコフは自分が風変わりな帽子を被っているために目立つのがよくないと思う。

ラスコーリニコフは通りに面している大きな家に近づく。この家は小さな貸間から成り立っていて、いろいろな人が間借りしているが、ここで次のように間借り人たちのことが描写される。「そこにはあらゆる種類の職人——仕立屋、錠前屋、料理女、いろいろなドイツ人、自分を売って生きている娘、下級官吏などが住んでいた<sup>10)</sup>。」これはこの時代にサンクトペテルブルグの町が急速に発展し、仕事を求めて田舎からサンクトペテルブルグに出てきた大勢の貧しい人々が劣悪な住宅環境で暮らしていた様子を描く有名な場面であるが、この時代のサンクトペテルブルグにはドイツ人も住んでいたのである。

ラスコーリニコフがこの家の階段を上がっていくと、引っ越しのために荷物を運び出している人々とすれ違う。「彼はもう以前から、その住居にはある家族持ちのドイツ人の官吏が住んでいることを知っていた。——『ということは、このドイツ人が今引っ越していくのだ。そうすると4階には、この階段沿いのこの踊り場には、当分の間、老婆の住居だけがふさがっていることになる<sup>11)</sup>。』」金貸しの老婆の隣人もドイツ人であった。

ラスコーリニコフはその後、金貸しの老婆の家を訪問する。彼は老婆の家の中がどのようなになっているかを覚えておこうとして部屋の様子に注意を向け、ドイツ娘を描いた粗悪な絵がかかっているのが目に留まる。「家具はすべてとても古くて、黄色の木製で、湾曲した木製の大きな背もたれのついたソファと、ソファの前の楕円形のテーブルと、窓の間の壁に取り付けられた鏡台と、壁際の椅子数脚と、小鳥を手にしたドイツ娘たちを描いた、黄色い額縁に入った安物の2、3枚の絵——これが全部

の家具だった<sup>12)</sup>。』『罪と罰』には黄色いものが繰り返し描かれていることはすでによく知られていて、これはラスコーリニコフの不安な気分を表していると考えられる<sup>13)</sup>。確かにこの場面にも黄色い品物が多いが、これと同様に『罪と罰』におけるドイツ製の品物の多さも明らかに意図的である。

ラスコーリニコフは居酒屋でマルメラードフと出会って彼の話聞き、その後マルメラードフを家まで送っていく。マルメラードフはドイツ人コーゼルの家を借りている。家の前まで来るとマルメラードフは「あ、もううちだ、コーゼルの家だ。錠前屋の、金持ちのドイツ人の<sup>14)</sup>…」と言う。彼等は部屋を直接コーゼルから借りているのではなく、別の人物だがやはりドイツ人である、アマーリヤ・リップヴェフェゼリという女性から部屋を又借りしている。

ラスコーリニコフは下宿先の家賃を滞納しているために警察署に呼び出される。ここで彼はドイツ人女性が警察官と話しているのを見かける。「『ルイーザ・イワーノヴナ、お座りになったら…』と彼はさりげなく、椅子がそばにあるにもかかわらず座ることができないかのようですと立ったままでいた、着飾った赤ら顔の婦人に言った。彼女は『Ich danke.(ありがとうございます。)]』と小声で言い、衣擦れの音をさせながら椅子にふんわりと腰を下ろした。白いレース飾りの付いた明るい空色の彼女のドレスはまさに軽気球のようで、椅子の周りに広がり、ほとんど部屋の半分を占めていた。香水の匂いが漂ってきた。しかし婦人は自分が部屋の半分を占めてしまったことや彼女から香水の匂いが漂っていることに見るからに怖気づいていて、臆病そうに、また同時に厚かましく、明らかに不安げに微笑んでいた<sup>15)</sup>。』彼女はドイツ語風のアクセントのロシア語を話すのであるが、ドストエフスキーは、ドイツ語の単語「とても」(ganz)をロシア語の中に取り混ぜて ганц とキリル文字で表記したり、ドイツ語の l とロシア語の л(l) は若干発音が違うことからドイツ人の発音するロシア語の л(l) を ль (l') と表記したりして、彼女の話し方を面白おかしく描いている。ステレオタイプなドイツ語風のアクセントのロシア語の面白さが分かるように、ここでは翻訳ではなく原文を引用しよう。

-- Никакой шум и драки у меня не было, господин капитэн, -- затараторила она вдруг, точно горох просыпали, с крепким немецким акцентом, хотя и бойко по-русски, -- и никакой, никакой шкандаль, а они прошоль пьян, и это я всё расскажит, господин капитэн,

а я не виноват.. у меня благородный дом, господин капитэн, и благородное обращение, господин капитэн, и я всегда, всегда сама не хотела никакой шкандаль. А они совсем прошоль пьян и потом опять три путилки спросил, а потом один поднял ноги и стал ногом фортепьян играл, и это совсем, нехорошо в благородный дом, и он ганц фортепьян ломаль, и совсем, совсем тут нет никакой манир, и я сказала. А он путилку взял и стал всех сзади путилкой толкаль. И тут как я стал скоро дворник позвал и Карль прошоль, он взял Карль и глаз пробиль, и Генриет тоже глаз прибил, а мне пять раз щеку биль. И это так неделикатно в благородный дом, господин капитэн, и я кричал. А он на канав окно отворяль и стал в окно, как маленькая свинья, визжал; и это срам. И как можно в окно на улиц, как маленькая свинья, визжал; и это срам. Фуй-фуй-фуй! И Карль сзади его за фрак от окна таскаль и тут, это правда, господин капитэн, ему зейн рок изорвал. И тогда он кричал, что ему пятнадцать целковых ман мусштраф платить. И я сама, господин капитэн, пять целковых ему зейнрок платил. И это неблагородный гость, господин капитэн, и всякой шкандаль делать! Я, говорил, на вас большой сатир гежрюкт будет, потому я во всех газет могу про вас всё сочинил<sup>16)</sup>..

ラスコーリニコフは通りでマルメラードフが馬車に轆かれて大けがをすところに行き合わせ、彼をカテリーナの家連れて行くのを手伝う。この様子を見たカテリーナは戸を開けて外へ駆け出そうとするが、そこですぐに家主のドイツ人女性と出会う。「(前半省略)しかし、ドアのところでまさにそのリッペヴェゼリ婦人とぶつかった。彼女はちょうど不幸な出来事のことを聞きつけて、状況を鎮めるために駆けつけてきたのだ。彼女は非常に口やかましくてだらしないドイツ人女性であった<sup>17)</sup>。」カテリーナはこの家主の婦人に対していつも高飛車な態度を取っており、ここでも彼女と口げんかをする。

マルメラードフを診察しに来た医者もドイツ人であった。彼の様子は「几帳面らしい老人でドイツ人の医者が、不審そうに辺りを見回しながら入ってきた<sup>18)</sup>。」と描写されている。

ルージンとドゥーニャの婚約は破棄されるが、彼らの新居の家主もドイツ人であった。「とりわけ彼（訳者注ルージン）をいらだたせたのは、まもなく結婚するために彼らが借りて自費で、内装を作り変えた住居の家主であった。その家主は成り上がり者のドイツ人の職人で、

ごく最近結んだばかりの契約の解除を決して承諾しようとしただけでなく、ルージンが住居をほとんど新しい内装にして返したにもかかわらず、契約書に書いてある違約金を全額要求した<sup>19)</sup>。」常に規則の通りで人情に左右されることがないというのは、ロシア人から見たステレオタイプなドイツ人の描写であろう。

### 3. ロシアにおけるドイツ系移民の生活

モスクワに国家勤務のためにドイツ人が来るようになったのは16世紀頃からである。リボニア戦争（1558-1583）の際にバルト海沿岸から捕虜と一緒に連れてこられた人々は、イワン雷帝の命令によりヤウザ河畔の外国人村やドイツ人村に居住させられていたが、ここはスムータ<sup>20)</sup>や17世紀初頭の内政干渉の時代に燃えてしまった。17世紀の間ずっと、ロシアの貿易の発展と国家権力と貴族が外国の技術者たちへの関心を高めたこととの関連で、ドイツ人や他の外国人の数は常に増え続けた<sup>21)</sup>。

ピョートル I 世（1672-1725、在位1682-1725）は子供の頃からモスクワのドイツ人村に出入りしていた<sup>22)</sup>、ここから強い影響を受けている。彼の治世にはロシアの西欧化がなされ、彼がドイツから多くの物を取り入れたことはよく知られている。ピョートルは西ヨーロッパ諸国のうちに科学や文化の様々な分野の専門家、高度な技術者を見出し、彼らをロシアに招いて、彼らが実り多い仕事をする機会を与えた。これはロシア近代化の過程、とりわけその最初の段階における主要な潮流の一つであった。1702年にはもう西ヨーロッパ諸国のあちこちに、ロシアに外国人たちを有利な条件で招待するというピョートル I 世の覚書が掲示されていた。招待された人々の中には学者、軍司令官、技師、医者、教師、俳優、船乗りなどがいた<sup>23)</sup>。

エカテリーナ II 世（1729-1796、在位1762-1796）も西ヨーロッパ諸国、特にドイツからの移民を奨励した。1762年にエカテリーナ女帝がロシアの使用されていない広い土地に外国人の移民を奨励する方針を発表し<sup>24)</sup>、この法令によって大勢のドイツ人が有利な条件でロシアに移住するようになった。ロシア側から提示された移民の条件は大変気前のよいもので、移民はロシアに無償で土地を与えられ、何年にもわたって税金も納めなくともよく、信仰や自治の権利は保障されており、兵役も免除されていた。戦争で疲弊していたドイツ人の農民、兵士、手工業者など多くの人々がこの機会にロシアに移住を決意し、これがロシアにおけるドイツ人居住地の始まりとなった<sup>25)</sup>。

ドイツ人はヴォルガ川流域に大勢住んでいて<sup>26)</sup>、ドイ

ツ人村は主にモスクワ、ヴォルガ川付近、サンクトペテルブルグにあったが、他にもさまざまな地域に入植した。当時ドイツ人たちはロシア国内のドイツ人村に住んでいたが、必ずしも隔離されていたわけではない。

ロシアの学問は当初、主にドイツ人によって開始され、科学アカデミーの研究職を占めているのは、最初ドイツ人ばかりであった。17～18世紀のペテルブルグの科学アカデミーでは、数学、植物学、生物学、東洋学などの各分野でドイツ人の研究者が活躍し、サンクトペテルブルグの図書館のアルファベット順目録を整えたり、カムチャッカ半島の探査を行ったりしたのもドイツ人であった。職人や商人や医者もドイツから大勢サンクトペテルブルグにやってきて住むようになり、建築、劇場、新聞雑誌、教育にも大勢ドイツ人が携わっていた<sup>27)</sup>。彼等は次第にロシア人と同化していった。

D. ダリマンによると、1750年にサンクトペテルブルグの成人の人口は74,283人で、そのうち5,735人は外国人であった。そのうち何パーセントがドイツ人であったか正確にわからないが、ドイツ人は外国人のうちもっとも大人数の集団であったので、50パーセント以上であったことは十分に考えられる<sup>28)</sup>。1780年ごろにサンクトペテルブルグに居住していたドイツ人は16,000人から17,660人であった<sup>29)</sup>。

日本人研究者の中では橋本伸也がピョートル大帝の科学アカデミー設立<sup>30)</sup>や、帝政期ロシアのお雇い外国人のドイツ人が科学アカデミーに大勢いた様子を書いている<sup>31)</sup>。しかし、ロシア国内にロシア人とは異なるドイツ人の一大勢力があったと考えるのは行き過ぎであり、ドイツ人はロシア人に同化しながらやっていたということである。

これらの資料から、ドイツ人の研究者や職人たちによってサンクトペテルブルグの科学アカデミーにおける研究活動や輝かしい文化が形成され、西欧の水準に届く高い技術がロシアに導入されたこと、またその一方で、移民してきたドイツ人たち自身も皆が裕福で優秀な人々ばかりであったわけではないことが分かる。このような歴史的事実と照らし合わせると、『罪と罰』に非常に多くのドイツ人が描かれているのは、史実に合致するごく自然なことであるのが分かる。もっとも、『罪と罰』で多く描かれるのは、輝かしい業績を成し遂げたドイツ人ではなく、むしろ社会的地位があまり高くないドイツ人たちの方であり、彼らが過度な節約家である様子やドイツ語風のアクセントで話す様子が強調されて滑稽に描かれている。『罪と罰』は、ドイツ文化の影響を強く受けた当時のサンクトペテルブルグとロシアの社会を批判的に

描いていると言える。

#### 4. どこから来たのか分からないドイツ人

再び『罪と罰』に戻ろう。

カテリーナはマルメラードフの葬式の後、家主のドイツ人女性とまた喧嘩をして、「ねえ、ラスコーリニコフさん、お気づきですか？このサンクトペテルブルグにいる外国人は皆、つまり主にどこから来たのか分からない<sup>32)</sup>ドイツ人ですけれど、皆私たちよりも馬鹿だということに<sup>33)</sup>！」と言う。カテリーナの文句はこの後も続き、彼女は家主の話がつまらないと言って、家主のドイツ語なまりを真似て話してみせる。ドイツ人の家主はドイツ語なまりのロシア語で「お父さんはベルリンから来た、とてもとてもえらい人だ、両手をポケットに入れてこんな風に歩いていた<sup>34)</sup>。」とカテリーナに言い返す。

19世紀やそれ以前のロシアにおいて、ドイツ人はドイツ出身であるというよりもドイツ語話者であり、ドイツ語を話す北欧やバルト地域の外国人も含んでいて、誰をドイツ人といえよいか分からない面があった<sup>35)</sup>。

サンクトペテルブルグにはルーテル教の教会や学校、病院などもあり、これらの学校や教会にはドイツ語のほかにエストニア語やフィンランド語を使用するところもあったが、ロシア人からはすべてがドイツ系であるときみなされていた<sup>36)</sup>。ルーテル教の教会はサンクトペテルブルグにいくつかあったが、その中でも特に有名だったのは聖ペトロ教会である<sup>37)</sup>。1783年のエカテリーナ二世の命令でサンクトペテルブルグの聖ペトロ学校はロシア帝国内のドイツ人学校の手本となった。この学校はロシア革命の時まで存続し、ドイツ語で授業がなされていた<sup>38)</sup>。

現在のバルト三国には12世紀頃からドイツ騎士団が侵入し、この地域の住民たちはカトリックを受け入れ、ドイツ騎士団の支配下にあつてドイツ化していた。エストニア人などは、ピョートルI世が1703年にサンクトペテルブルグの町を建設した後にロシア国内で活躍する機会を得て、サンクトペテルブルグに居住するようになっていたのである<sup>39)</sup>。

こういった事情を踏まえると、カテリーナの言う「どこから来たのか分からないドイツ人」という表現も、ドイツ本国から来たのではなくバルト三国周辺の人々やその他の西ヨーロッパ諸国からサンクトペテルブルグにやって来た外国人が「ドイツ人」というカテゴリーに含まれていることへの皮肉だと理解できる。

このようにして、作品全体、特に小説の前半部分のサンクトペテルブルグに住む貧しい人々の日常生活の描写の中で、ドイツ人やドイツ語話者が多く登場する。『罪

と罰』にはドイツ以外の外国も描かれないわけではなく、自殺を計画しているスヴィドリガイロフがソーニャに自分はアメリカへ行くと言ったり<sup>40)</sup>、亡くなったマルメラドフの法事にポーランド人が来たりする<sup>41)</sup>。しかし、他の外国の描写はそれほど多くなく、ドイツが圧倒的に多い。ドイツ関連の人物や品物の描写を通じて伝わってくるのはドイツ文化そのものの様相ではなく、むしろ当時のサンクトペテルブルグの社会と人々の生活の方である。もともと『罪と罰』は、サンクトペテルブルグの貧困層の生活を多く描いていることで有名な作品であるが、これらの描写は多くの場合、実質的にはドイツの人物やドイツ人と関連している。サンクトペテルブルグはロシアの他の町と比べても外国文化やドイツ文化の影響が強い町であったが、それが作品にも表れている。当時のサンクトペテルブルグの人々にとって、ドイツとは単に文学作品や哲学的著作を通じてのみ需要するものであったわけではなく、教養人のみが高尚なドイツ文化に触れていたわけでもなく、一般の人々や貧しい人々の日常生活の中にもドイツの事物は現実のものとして入り込んでいたことが分かる。

##### 5. ラスコリーニコフとスヴィドリガイロフ

さて、サンクトペテルブルグの町に住む貧しい人々に、ドイツ人を目にする機会やドイツ製の品物に触れる機会が多くあった一方で、『罪と罰』に描かれる雑階級人たちや知識人層は、どのように町中のドイツ人を見て、どのようにドイツ文化を捉えていたのであろうか。

『罪と罰』では、ラスコーリニコフもその友人のラズーミヒンもスヴィドリガイロフも皆、ドイツ語に堪能であるとされている。ラスコーリニコフもラズーミヒンもスヴィドリガイロフも、ドイツ文化の影響を非常に強く受けている当時のロシアの知識人層の典型なのである。

『罪と罰』の最初の部分では、ラスコーリニコフは友人のラズーミヒンを訪問する場面がある。ラズーミヒンはドイツ語の翻訳の仕事を彼に分けてやろうとして、「第二にドイツ語はよく分からないから、自分で創作することが多くなってしまって、その方がかえって良い文章ができる」と自分を慰めている。良くならないで悪くなっているかもしれないが… 君はやるかい、やらないのかい<sup>42)</sup>？」と言う。結局ラスコーリニコフは翻訳の仕事を引き受けるのをやめて、ほんやりと考え事をしながらラズーミヒンのところから去る。もっとも小説の後の箇所では、ラズーミヒンはラスコーリニコフに仕事を引き受けさせようとしてドイツ語が得意でないふりをしたものの、実際にはドイツ語が得意であったとされている。

小説の後半になると、これまで読者に対して秘密にされていたラスコーリニコフの殺人の問題に関する思想が語られるようになり、ラスコーリニコフが書いた論文の内容が明らかになったり、彼がポルフィーリイやスヴィドリガイロフを相手に自分の思想を語ったりする場面が多くなったりし、小説前半で描かれたラスコーリニコフの殺人者、犯罪者としての行動や心理を裏で支えていた彼独自の思想や哲学が多く論じられるようになるが、その一方で、身近な生活の中のドイツの事物の描写は減る。それでもやはり、スヴィドリガイロフの周辺にドイツ人が登場することが多い。

スヴィドリガイロフはラスコーリニコフに、進歩的な西欧型の人間は旧来のロシア人とは違って鞭など使うべきではないという話をするが、その際にドイツ人女性に触れる。「一人の貴族が（中略）汽車の中であるドイツ人女性を鞭で打ったんですよ？（中略）さて私の意見はこうなんです。そのドイツ人女性を鞭で打った紳士には、決して同情しない。なぜなら実際のところこれは… どうして同情なんかするのでしょうか！しかし、とは言うものの、ときには、私が思うには、どんな進歩主義者でも自分を保証しかねるような、そうした痛に障るドイツ人女性がいることを声明しないではいられません<sup>43)</sup>？」

その後ルージンがラスコーリニコフ、ドーニャ、彼らの母の3人に、スヴィドリガイロフとドイツ人女性たちの話をする。「私はただ、マールファ・ペトロヴナから自分で秘密に聞いたことを言っているだけです。法律の見地からすると、この事件は大変曖昧なものだと言っておかざるをえません。ここにレッシリヒという外国人で少額の高利貸をしたり、他の仕事もしたりしている外国人女性が住んでいました。おそらく今でも住んでいると思います。このレッシリヒとスヴィドリガイロフ氏とは以前からある極めて親密な神秘的な関係にあったんです。彼女のもとに遠縁の親戚の娘、おそらく姪で、耳と口が不自由な15歳か、14歳くらいかもしれないのがいて、彼女をレッシリヒがやたらと憎んで、ちょっと何かあるたびに叱りつけ、むごたらしく叩いたりしたんです。あるとき彼女は屋根裏で縊死していたところを発見され、自殺だと判定されました。通常の手続でそれは済みましたが、しかしその後、その子供はスヴィドリガイロフのために残酷な辱めを受けていたという密告があったんです。実際のところ、これらはすべてははっきりしなくて、密告は別のドイツ人女性で信用できないような札付きの者から出たんです<sup>44)</sup>。」

『罪と罰』ではスヴィドリガイロフについての悪い噂が絶えず描かれる。しかしよく作品を読み込むと、噂の

多くはどうやら嘘らしく、実際には彼はそれほど悪い人物でない可能性が高いことが分かる。例えば、スヴィドリガイロフは妻マールファ・ペトローヴナを殺害したと他の登場人物達皆から思われているが、本人は妻を殺害していないと語っている。ラスコーリニコフはスヴィドリガイロフが下男のリリップを拷問によって殺したという噂を聞いているが、これに対してドゥーニャは、リリップは単に元から病気でいて自殺しただけだと話している<sup>45)</sup>。スヴィドリガイロフは自殺する前にソーニャに自分の金を渡しているが、これによってソーニャが継母の連れ子たちを孤児院に入れて自分はラスコーリニコフについてシベリアへ行けるようになったのであって、この点においてはスヴィドリガイロフも善行を積んでいる。

ルージンもここで、スヴィドリガイロフとドイツ人たちの関わりについて奇妙な噂があったものの本当かどうか分からないという話をしたわけである。これをスヴィドリガイロフ自身の、癩に障るドイツ人女性もいるという話と照らし合わせてみると、スヴィドリガイロフには実際にドイツ人たちとの付き合いがあり、しかし彼らはスヴィドリガイロフにとってあまり良い人たちでなかったことが推測できる。癩に障るドイツ人女性というのは、密告をした札付きの信用できないドイツ人女性の事であるかもしれない。

スヴィドリガイロフが自殺を思い至るときにも、彼は酒場であまり印象の良くないドイツ人を見かける場面がある。「忌まわしい歌うたいの合唱隊と、何か赤い鼻の道化らしい、しかしなんとなく非常に憂鬱そうな、酔っ払いのミュンヘン生まれのドイツ人が、見物人たちを楽しませていた<sup>46)</sup>。」とされている。

ラスコーリニコフが自首しに行く場面でも、彼はドイツ人を見かける。「ほら、あの太った人、ドイツ人に違いない、僕におつかった、彼は誰におつかったか知っているんだろうか<sup>47)</sup>？」

さらに『罪と罰』にはドイツ系移民の直接的な描写のほかに、ドイツの詩人フリードリヒ・フォン・シラー(1759-1805)への言及が多く見られる。これもラスコーリニコフやスヴィドリガイロフの両方に多く関わっている。例えば、スヴィドリガイロフはシラーについてラスコーリニコフに次のように言う。「じゃあ、あなたは力を求めているのですか。あはは、あなたは今私を驚かせましたよ、ロジオン・ロマーノヴィチ、もっとも、こうなるだろうとあらかじめ知っていましたがね。あなたは私に淫蕩や美学について解説している！あなたはシラーだ、あなたは理想家だ！もちろん、すべてがそうあるべきで、もしそうでなかったら、それこそ驚かないといけ

ないのですが、しかし実際にこうとなると、やはりなんとなく変ですね…ああ時間が少ししかないのが残念です、あなたというのは本当に興味深い人ですからね。ところで、あなたはシラーが好きですか？私は大変好きなんです<sup>48)</sup>。」その後もスヴィドリガイロフは繰り返し、ラスコーリニコフのことを「シラーだ、我らのシラーだ、シラーだ<sup>49)</sup>。」と言ってからかう。

『罪と罰』の作品世界において、シラーやシラーの文学作品とは高邁な理想を表すものであり、それと同時に現実的ではない理想でもある点で皮肉の対象にされている。シラーという言葉は詩人の名前であることを越えて、主人公ラスコーリニコフが家族や貧しい人々を助けるために優れた人になりたいと考える純粋な心を持っていることと、とはいえこれが実現不可能な考えでありそのための老婆殺しなど論外であったことの両方を表している<sup>50)</sup>。シラーを好きだと言う理由からラスコーリニコフをからかうスヴィドリガイロフにとってもやはりシラーは好きな作家であり、高邁な理想である。

シラーの文学の激情的な理想主義の特徴を考慮すると、先にスヴィドリガイロフがドイツ人女性と「極めて親密な神秘的な関係」にあったことも少し理解できてくる。シラーの文学の雰囲気をも熱狂的に信じた結果、スヴィドリガイロフはドイツ人女性との間に精神的で親密な友情や神秘的な関係が成立すると真剣に考えて行動していたが、これが周囲には理解されずに、別のドイツ人女性から彼の行動は姪が目当てだったと誤解されたのではないか。彼が高尚なシラーの文学作品を通して期待していたドイツのイメージと、現実の一般的なドイツ人達は異なっていたのではないか。

ラスコーリニコフはスヴィドリガイロフのことを嫌っているが、この二人には多くの共通点があり、彼らはシラーを巡って共感し合っている面がある。サンクトペテルブルグの知識人たちに強い影響を与えたドイツ文学者やドイツ哲学者は多種多様であるが、その中でもシラーの存在は特に大きい。

## 6. ドイツを描く他のロシア文学作品

ドストエフスキーの他の文学作品のうち、ステレオタイプなドイツ人が描かれるのは『鱈』(1865)である。この作品もサンクトペテルブルグを舞台としているが、百貨店の内部の様子が描写され、さらにそこに鱈を展示しに来たドイツ人商人とその母親がコミカルに描かれて、サンクトペテルブルグに起こりつつあった資本主義の動向の片鱗が批判的に描かれる。

『賭博者』(1866)でもドイツが描かれる。『罪と罰』

と非常に近い時期に書かれたこの作品はドイツを舞台としていて、物語はドイツ国内の保養地でロシア人やイギリス人、フランス人、ポーランド人たちの社交界が描かれる。主人公は自分がロシア人であることや、ロシア人には西欧人とは異なる面があることを意識していて、「だって本当に、ロシア式のめちゃくちゃと、誠実な勤労によるドイツ式蓄財法と、一体どちらがより醜悪か、まだ明らかになっていないでしょう<sup>51)</sup>？」「僕はドイツ式の偶像にひれ伏すよりも、一生キルギス人の天幕で放浪しつづけていたいですね<sup>52)</sup>。」「僕はここに少し前に来たばかりだけれど、でもやはり、ここですでに気づいたり、確かめたりしたことがあって、僕の中のタタールの血を憤激させるんです<sup>53)</sup>。」などと言っている。ここで興味深いのは、彼がロシア古来の文化だけを近代的なドイツ文化と対比させているのではなく、かつてはロシアが朝貢したキプチャク汗国内の民族で、その後はロシアに支配されるロシア国内の少数民族となったタタール人やキルギス人の特徴をロシア人自体の特徴として、これをドイツ文化と対比的にとらえていることである。ドイツとロシアそのものの対比でありながら、ロシア人の中におけるタタールやキルギスの文化をドイツと対置している。多くの国から影響を受けて築かれたロシア文化の面白い点である。

『冬に記す夏の印象』(1863)は『罪と罰』より少し前に書かれたが、作家ドストエフスキー自身が西ヨーロッパを旅行した時の旅行記で、ドイツ滞在にも触れている。ドストエフスキーの現実のドイツの社会に対する批判的な考え方が分かる。ドストエフスキーは子供の頃からドイツ文学に親しみ、彼自身もドイツ文化の影響を強く受けているが、その一方でときにはドイツ文化を皮肉な視点から描写している。ドストエフスキーのドイツ文化理解がよく分かる旅行記である。

しかし『賭博者』や『冬に記す夏の印象』に対して、『鱈』や『罪と罰』では、ドイツそのものが作品の舞台となることはない。『鱈』もそうであるが、『罪と罰』の舞台はあくまでもロシアの町サンクトペテルブルグであり、サンクトペテルブルグの中にあるドイツ的な要素とドイツ文化が描かれる。『罪と罰』はドイツ文化やドイツそのものを描く作品ではなく、ロシアへのドイツ文化の影響やロシア国内におけるドイツ人とドイツ文化の位置づけを描く作品である。ドイツにおけるドイツ文化そのものとは必ずしも同じではない、ロシアの中のドイツ文化が問題となっている。

ロシア文学作品におけるドイツ人の形象で有名なのは、イヴァン・ゴンチャロフ(1812-1891)の長編小説『オ

ブローモフ』(1849-1859)のシュトリツであろう。彼は勤勉で、ロシア人から見た典型的なドイツ人のイメージを体現している。A.S. プーシキン(1799-1837)の『スベードの女王』(1833)の主人公ゲルマンもドイツ系である。この作品のテーマには金銭の問題というものもあり、これがロシア人から見たドイツらしさとも関わっている。これらの作品でも、ドイツにいるドイツ人ではなく、ロシア国内のドイツ系の人が描かれている。ロシアにおけるドイツ観念論哲学の受容には、イヴァン・キレーエフスキー(1806-1856)やニコライ・スタンケーヴィチ(1913-1840)が大きな役割を果たした<sup>54)</sup>。ワシーリイ・ジュコーフスキー(1785-1852)はドイツ文学を多くロシア語に翻訳したが、彼の翻訳は原作を超える名作として知られている<sup>55)</sup>。ドストエフスキーの文学作品におけるドイツ系移民の形象も、これらのロシア文学の伝統に連なるものである。

## 7. 結論

『罪と罰』が、ドイツを中心とした西ヨーロッパの哲学と文化をロシアに取り入れたときに起こる問題を描いた小説であり、西ヨーロッパから流入した思想とロシアの土着の民衆が対照的に描かれていることは、すでに広く知られている。ラスコーリニコフは西欧文化やドイツの哲学の影響を強く受けた人物であり、ナポレオンをモデルにして、特別な人間である非凡人には凡人にない権利があるとする理論を構築する。この作品の主要な筋書きには、ソーニャが体現するようなロシア正教とロシアの土着の民俗文化<sup>56)</sup>によってラスコーリニコフが救済されて復活するという面がある。ラスコーリニコフが過ちを犯したのには、彼がロシア人でありながらも教育をうける過程で西欧の外国文化の影響を強く受けすぎ、土着のロシア文化から切り離されてしまっていたせいであるというのが、伝統的な『罪と罰』の理解である<sup>57)</sup>。『罪と罰』にはラスコーリニコフやスヴィドリガイロフが繰り返しシラーに言及する様子が描かれ、彼らがシラーに傾倒しつつもシラーに反発する様子が分かる。当時のロシアの知識人たちのものの考え方にはドイツ文学が深く浸み込んでいることがここからも理解できる。

本論ではこの伝統的な解釈を裏付けるものとして、ラスコーリニコフのような知識人層が個人的に本を通じてドイツ文学や哲学を受容していたのではなく、当時サンクトペテルブルグの町自体がドイツ文化の影響を強く受けており、人々の日常生活に身近なところでドイツ人やドイツの品物があふれていたこと、『罪と罰』にはこの様子が描写されていること、ラスコーリニコフが語るシ

ラーの引用やドイツ文化の影響を受けた考え方は日常生活におけるドイツの事物とも関連していることを付け加えたい。思想上の影響関係だけでなく、作品に描かれる日常生活の中のドイツに目を向けることで、『罪と罰』という作品をより立体的にとらえて、作品が訴える思想をより深く理解することができる。

注

- 1) *Вильмонт Н.* Достоевский и Шиллер: заметки русского германиста. Москва, Советский писатель, 1984.
- 2) *Данилевский Р. Ю.* Фридрих Шиллер и Россия. Спб. Изд-во Пушкинского дома, 2013, С. 464-490.
- 3) 井桁貞義『ドストエフスキー：言葉の生命』群像社、2003年、174-205頁。
- 4) Humiston Kim R. *The Influence of Shiller's concept of aesthetics on Dostoevsky's major Fiction* The Florida State University, 1987.
- 5) ゴロソフケル、木下豊房訳『ドストエフスキーとカント：『カラマーゾフの兄弟』を読む』みすず書房、1988年。
- 6) シェストフ、近田友一訳『悲劇の哲学：ドストエフスキーとニーチェ』現代思潮社、1968年。
- 7) W. シューバルト、駒井義昭訳『ドストエフスキーとニーチェ』富士書店、1997年。
- 8) Kindlon, Paul *The Anti-Platonic Affinity Between Nietzsche and Dostoevsky* University of Illinois at Chicago, 1991.
- 9) *Достоевский Ф.М.* Полн. собр. соч. в 30-ти т. Л., Наука, 1973. Т.6. С.7. ドストエフスキー文学の引用はすべてこのアカデミー版のドストエフスキー全集から行う。翻訳は木寺による。
- 10) *Достоевский Ф.М.* Т.6. С.7.
- 11) *Достоевский Ф.М.* Т.6. С.7-8.
- 12) *Достоевский Ф.М.* Т.6. С.8-9.
- 13) 清水孝純『ドストエフスキー・ノート：『罪と罰』の世界』九州大学出版会、1981年、293～294頁。
- 14) *Достоевский Ф.М.* Т.6. С.22.
- 15) *Достоевский Ф.М.* Т.6. С.76.
- 16) *Достоевский Ф.М.* Т.6. С.78-79.
- 17) *Достоевский Ф.М.* Т.6. С.141.
- 18) *Достоевский Ф.М.* Т.6. С.142.
- 19) *Достоевский Ф.М.* Т.6. С.277.
- 20) ロシア史の動乱時代のことで、1598年から1613年までを指す。
- 21) *В.А. Говригина* Немецкая слободв Москвы С.7. // *Ред. Л. В. Славгородская и др.* Немцы в России : люди и судьбы. Спб. 1998.
- 22) 栗生沢猛夫「モスクワの外国人村」『人文研究』69号、1985年、1-28頁。
- 23) *Зюсс В.* Становление развитие социокультурных образовательных связей России и Германии : эпоха Петра I/ С. 146. // *Отв. ред. Г.И. Смагина*, Немцы в России : Российско-немецкий диалог, Спб. Дмитрий Буланин, 2001, С. 145-154.
- 24) *Бугай Н.Ф. и др.* Немцы : 250 лет в России Москва. Гриф и К., 2012. Т.1 С. 67.
- 25) *Бугай Н.Ф. и др.* Немцы : 250 лет в России Т.1 С.5.
- 26) アルカージー・ゲルマン、イーゴリ・プレーヴェ著（鈴木健夫、半谷四郎訳）『ヴォルガ・ドイツ人：知られざるロシアの歴史』東京、彩流社、2008年。
- 27) *Отв.ред.Смагина Г.И. и др.* Немцы в России : Петербургские немцы Спб., Дмитрий Буланин, 1999, *Отв. ред.Славгородская Л. В. и др.* Немцы в России : люди и судьбы Спб. Дмитрий Буланин, 1998.
- 28) *Дальман Д.* Петербургские немцы в XVII столетии : крестьяне, ремесленники, предприниматели. С.156-157. // *Отв. ред.Смагина Г.И. и др.* Немцы в России : Петербургские немцы. С.156-163.
- 29) *Дальман Д.* Петербургские немцы в XVII столетии : крестьяне, ремесленники, предприниматели. С.157-158. // *Отв. ред.Смагина Г.И. и др.* Немцы в России : Петербургские немцы. С.156-163.
- 30) 橋本伸也「ライブニッツとロシア」、望月哲男編著『創像都市ペテルブルグ：歴史・科学・文化』北海道大学出版会、39-61頁。
- 31) 橋本伸也「帝政期ロシアの「御雇外国人」教師：サンクト・ペテルブルグ科学アカデミーとモスクワ大学」、前川和也編著『空間と移動の社会史』ミネルヴァ書房、2009年、239-266頁。
- 32) 直訳なら「どこからかやってくる」の意になる。
- 33) *Достоевский Ф.М.* Т.6. С.297-298.
- 34) *Достоевский Ф.М.* Т.6. С.299.
- 35) *Дальман Д.* Петербургские немцы в XVII столетии : крестьяне, ремесленники, предприниматели. С. 157. // *тв. ред.Смагина Г.И. и др.* Немцы в России : Петербургские немцы. Дмитрий Буланин, 1999, Спб.
- 36) *Тащенко Т.Н.* Немецкие евангельческо-лютеранские общины в Санкт-Петербурге в XVIII-XX вв. // *Отв. ред. Смагина Г.И. и др.* Немцы в России : Петербургские



- немцы, С.245-280.
- 37) *Архимандрит Августин (Никитин)* *Немецкая евангелическо-лютеранская цевровь Св. Петра. // Отв. ред. Смагина Г.И. и др. Немцы в России : Петербургские немцы, С.281-320.*
- 38) *Таценко Т.Н.* *Немецкие евангельческо-лютеранские общины в Санкт-Петербурге в XVIII-XX вв. С.250. // Отв. ред. Смагина Г.И. и др. Немцы в России : Петербургские немцы, С.245-280.*
- 39) *Этнические немцы России : исторический феномен «народа в пути» : материалы XII международной конференции, Москва, 18-20 сентября 2008 г. // [научный редактор, А. А. Герман]. Москва, Международный союз немецкой культуры, 2009. «Прибалтийские немцы до вхождения в состав Российской империи: три исторических сюжета» С.510-546.*
- 40) *Достоевский Ф.М.* Т.6. С.384.
- 41) *Достоевский Ф.М.* Т.6. С.293.
- 42) *Достоевский Ф.М.* Т.6. С.88-89.
- 43) *Достоевский Ф.М.* Т.6. С.216.
- 44) *Достоевский Ф.М.* Т.6. С.228.
- 45) *Достоевский Ф.М.* Т.6. С.228.
- 46) *Достоевский Ф.М.* Т.6. С.383.
- 47) *Достоевский Ф.М.* Т.6. С.405.
- 48) *Достоевский Ф.М.* Т.6. С.362.
- 49) *Достоевский Ф.М.* Т.6. С.371.
- 50) 『罪と罰』では他の人物もシラーに言及している。元々ラスコーリニコフはシラーに関心があり、母と妹ドゥーニャが婚約者のルージン氏に期待していることに腹を立てたときには「こういうことは、ああいうシラー式の美しい心を持った彼等にはよくあるな。——最後のときまでクジャクの羽で人間を飾って、最後のときまで善良さを期待して、悪いことは考えないようにする。」(*Достоевский Ф.М.* Т.6. С.37.) と考える。ラスコーリニコフはポルフィーリイからも「太陽におなりなさい、皆があなたを見ます。太陽はまず第一に太陽でなければならない、あなたはまた何を笑うのですか。私がシラーみたいなことを言うからですか？」(*Достоевский Ф.М.* Т.6. С.352.) と言われている。
- 51) *Достоевский Ф.М.* Т.5. С.225.
- 52) *Достоевский Ф.М.* Т.5. С.225.
- 53) *Достоевский Ф.М.* Т.5. С.225.
- 54) 坂庭淳史「キレーエフスキーとシェリング、プラトン：全一性を巡って」『プラトンとロシアⅢ』25号、2008年、60-80頁、坂庭淳史「1830年代ロシア文学の理想と現実：スタンケーヴィチとベリンスキー」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』60号、2015年、83-98頁、長縄光男「キレーエフスキーにおける「ナロード」の概念」『一橋論叢』76-3号、296-304頁。金子幸彦編『ロシアの思想と文学：その伝統と変革の道』恒文社、1977年、Rabow-Edling, Susanna *Slavophile Thought and the Politics of Cultural Nationalism* State Univeristy of New York Press, 2006. Abbott Gleason *European and Muscovite : Ivan Kireevsky and the Origin of Slavophilism* Harvard University Press Cambridge Massachusetts 1972.などを参照。
- 55) *Иезуитова Р.В.* *Жуковский в Петербурге.* Лениздат, 1976. *Vinitzky Ilya Vasily Zhukovsky's Romanticism and the Emotional History of Russia* Northwestern University Press, Evanston, 2015.
- 56) 例えば井桁貞義は、『罪と罰』に見られるソーニャの形象に見られるロシアの大地信仰の問題を論じている。井桁貞義『ドストエフスキー：言葉の生命』群像社、2003年、112-134頁。
- 57) 例えば高橋誠一郎も、ヘーゲルの哲学や西欧の思想家たちの思想との比較によって『罪と罰』を考察し、西欧文明のロシアへの影響とその問題点を論じている。高橋誠一郎『「罪と罰」を読む：「正義」の犯罪と文明の危機』、刀水書房、1996年。

(受付日2016年8月19日 受理日2016年10月26日)